

平成13年7月1日

(第52号)

# 鶴戸



暑中お見舞い申し上げます



鶴戸神宮ホームページ <http://www.m-surf.ne.jp/~udo/>

発行者兼編集者  
鶴戸神宮 社務所

# 奉納画「生命」について



宮司 杉田 秀清

四月十七日に「生命」(鵜戸の大自然)と題する杉戸絵が、三年越しの年月を経て完成し奉納された。

制作課程における画家井山氏との会話は、常に情熱に満ち溢れていた。鵜戸のすばらしい自然、生物を育み眞清水を生み、海を育てる社叢、岩礁とその奇岩に打ち砕ける波濤、大海原より輝き昇る太陽、天空にあり刻々と色彩の変る雲や月。

多くの参拝者の踏みしめにより凹んだ八丁坂の石段、洞穴の中で朝日に映え神々しく照り輝く御社殿、賑々しい参拝者の驚嘆の声や喧騒やざわめき。

そして祈らずにはおられない社や自然の佇まいの有りようは、まさにこれは太古より今日まで続いた鵜戸

の姿である。そんな会話から次第に熱のこもった議論に発展したものである。

観光とは元より信仰と結びついて、ある時は崇高なるものを求め、ある時は楽しさあふれるものであった。

それを日本人は次第次第に信仰をわすれてきたのではないかとの懸念を持つのである。

井山氏が今住んで主として制作活動に励んでいるパリの観光が、よりパリのなる為に、信仰が日常生活におけるあらゆる面、献花や供物をささげて朝夕に祈ることからヒンズー美術、ガムランの響く音楽や舞踊、各地各家にある独自の様式をもった割れ門、神殿様式など数えきれない習慣など生活が信仰を結びつい

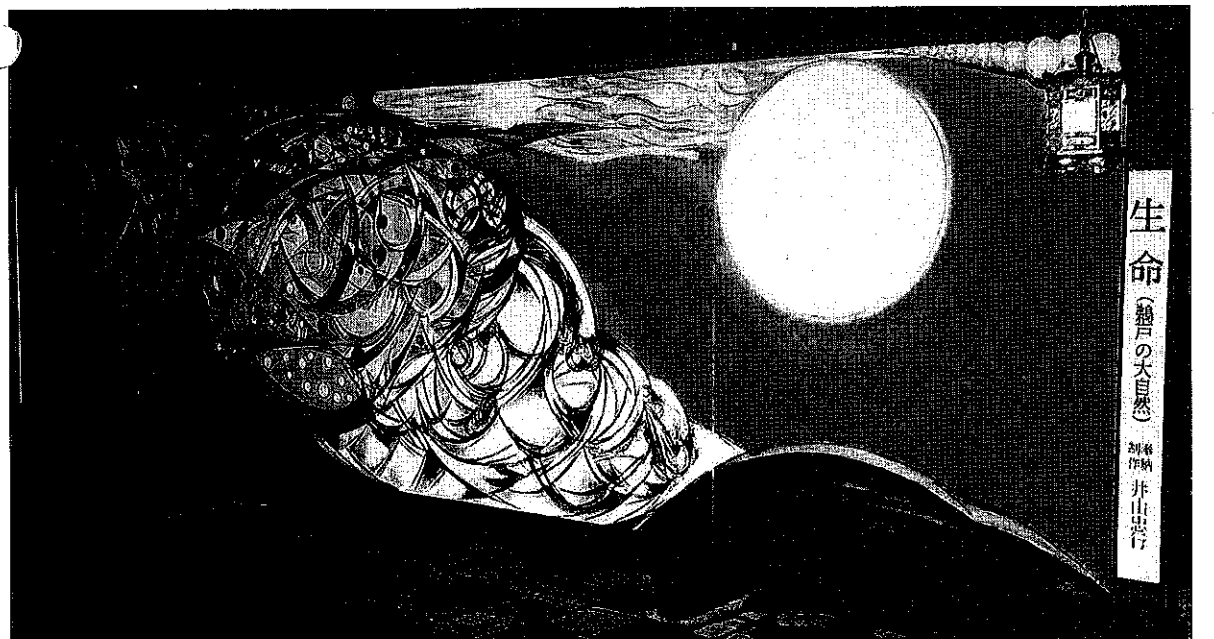
たところに今のパリの魅力があり、よりパリがパリのなることを目ざしている

と井山氏は強調する。

彼は国際的に活躍しながらも、パリで生活していく中で、パリの文化を受け入れながらも、日本人として目覚めたと思われる。その基本は、国際社会において日本人であることをベースにおかざるを得なかったことがあると思われる。彼は鵜戸に来る前から日向神話の太らかさに非常なる啓発を受け、この度の奉納には、彼の苦闘と、勉学と、日本人としての誇りを忍ばせるものがある。

それは太古を未来につながるものとなり、彼と私の一途な思いが絵に対して一致したような気がする。

そして、それは宮崎の人々があまり日向神話を知らなくなったことへの無念さと、宮崎の持つ自然の素晴らしさを再認識してほしい願いがあることから出たものにほかならない。



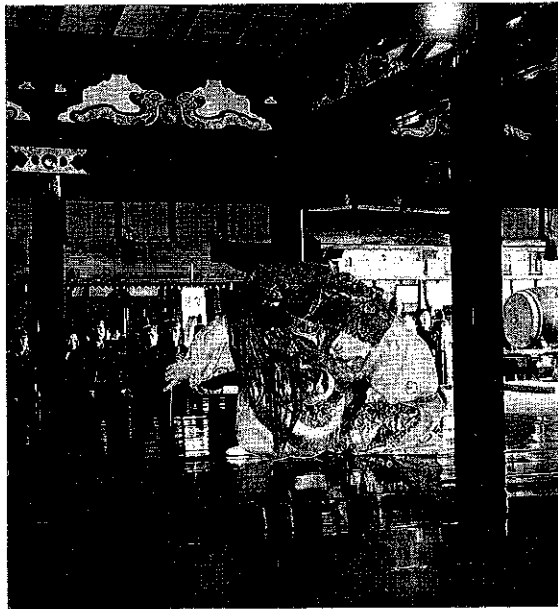
生命 (鵜戸の大自然) 奉納 井山忠行

## 例祭と奉祝行事

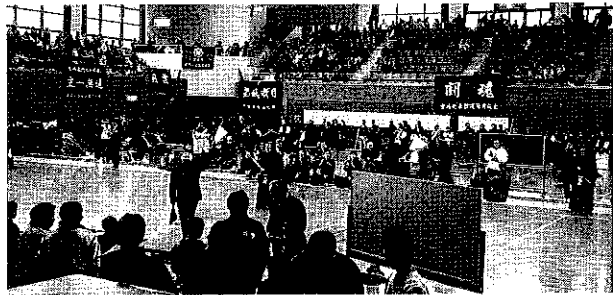
献幣使 老岐秋吉氏(都農神社宮司)の御参向の元、二月一日午前十時三十分より例祭を斎行。責任役員をはじめ多数の参列を賜り、舞楽「納曾利」が奏舞され、厳肅かつ盛大裡に行われた。又、祭典に先立ち福岡藩伝柳生新影流兵法 第十四代宗家 長岡鎮廣氏他により兵法が奉納された。

奉納四半の大会が境内で開催され、四十八チーム、二百二十四名が参加し腕を競い合った。

二月四日には、剣法発祥の地 鵜戸山頭影剣道大会が雨の為、場所を日南総合運動公園多目的体育館に移し開催。県内各地から男子団体百十五チーム、女子個人戦に二百八十六名が出場し熱戦が繰り広げられた。



舞楽 納曾利



## 御田植祭

三月十八日、午前十時三十分より大浦地区の御神田において、御田植祭が斎行された。

御神田は約一反の広さで、氏子の泉昭信氏、関屋勝氏、増竹義也氏の休耕田を借り受けた。

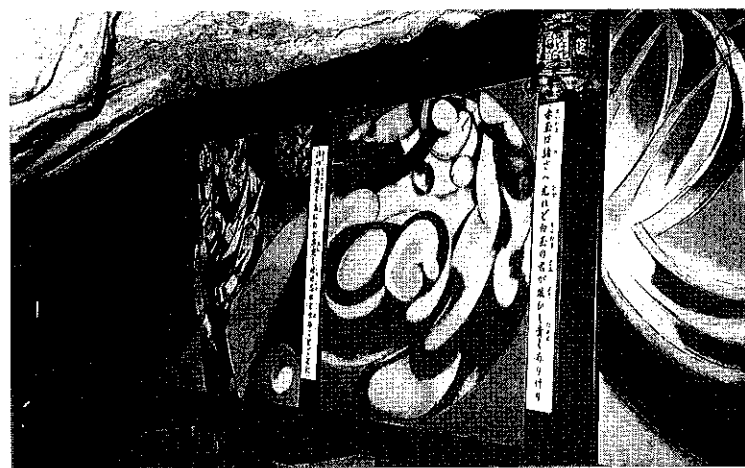
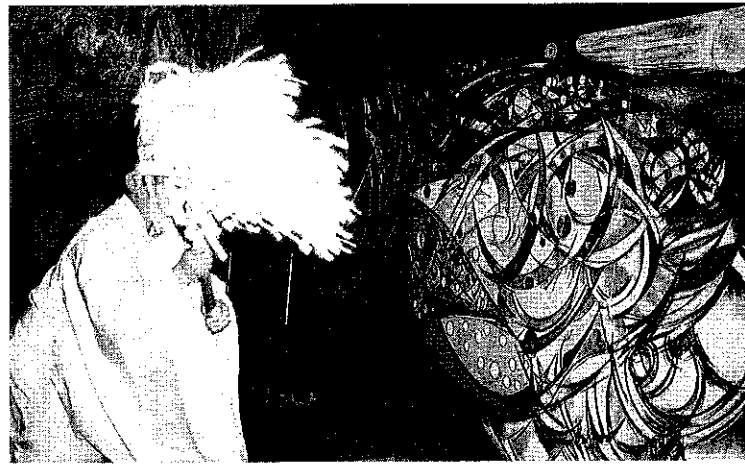
早苗は総代の黒木正春氏が引き受けられた。二月には播種祭が斎行され、稲が苗床に蒔かれこの日に向け準備が進められてきた。

当日は、風は少し肌寒く感じるも陽射しは暖かく、責任役員、氏子をはじめ多数の参列を賜った。

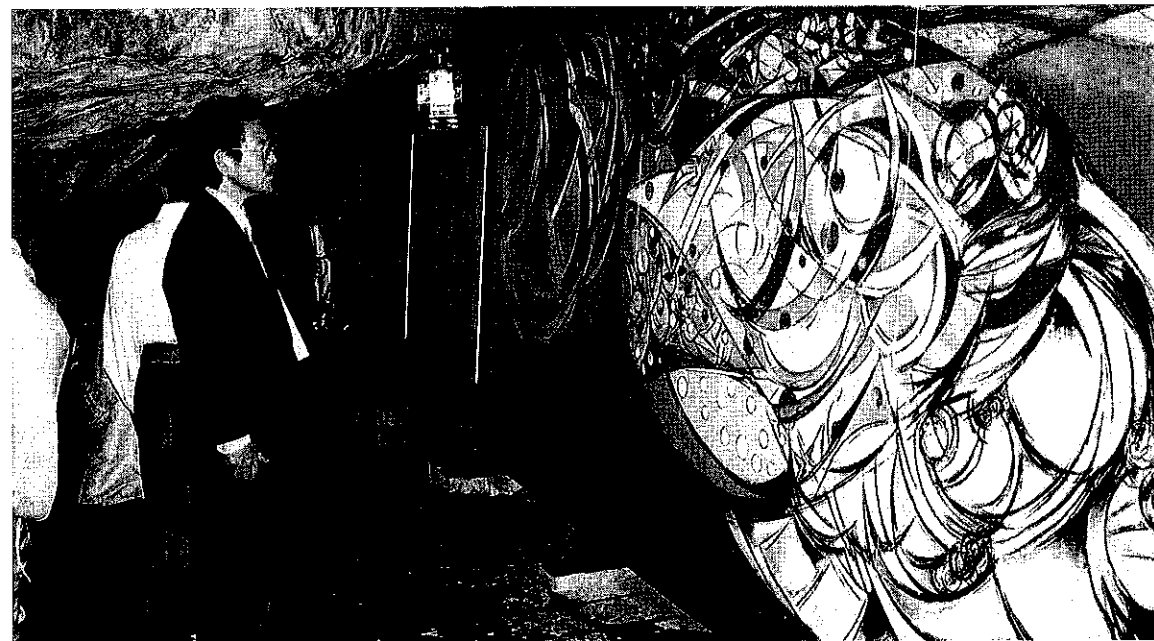
御田植の儀では、装束姿の田長や早乙女と一所に、小学生や地区の氏子の方々が田植え綱に合わせ、苗を丁寧に植えていった。

今後は、七月の抜穂祭まで毎月、御神田月次祭を斎行、稲の成長が祈願される。





山幸彦 (写真左)、豊玉姫 (中央)



画家 井山忠行 氏

宮崎市出身で、インドネシア・バリ島在住の画家井山忠行氏が杉戸絵を奉納。奉告祭は四月十七日、井山忠行氏をはじめ多数の参列を賜り、厳粛に斎行された。

### 杉戸絵奉納奉告祭

「生命」と名付けられた杉戸絵は縦二メートル、横六・四メートルの板に鶺戸神宮の風景、縦横一・六メートルの板二枚に、山幸彦と御祭神 鷲鷲草葺不合尊を胎内に宿した豊玉姫がアクリル樹脂絵具で描かれている。

この絵は、御本殿裏に取りつけられていたが、五月に井山氏の個展が宮崎市の県立美術館で終了した後、授与所に移設された。井山氏は、本県出身の瑛久を中心に結成されたデモクラート美術家協会の会員として瑛久、加藤正らに学んだ。協会解散後も精力的に作品を制作され活躍されている。



### 別当宮司先賢慰霊祭

神仏合同の慰霊祭として位置づけられている別当宮司先賢慰霊祭が、五月十五日午前十一時より鶺戸山別当墓地において、しめやかに斎行された。

当日は、歴代別当宮司遺族をはじめ多数の参列を賜り、宮司祝詞奏上の後、願成就寺住職 川崎光俊氏(日南市)、王楽寺住職 甲斐芳文氏(宮崎市)の経が奏上され、御詠歌の法要が営まれた。



初日は、日南市文化センターで予選が行われ、県内はもとより遠くは東京都や富山県などから六百六十七名が参加した。

二日目は当神宮儀式殿にて決勝戦が行われ、年齢ごとに分けられた七部門から百八十名が参加。太鼓や三味線、尺八に合わせ張りのある声を披露し、会場は早朝から大勢の民謡ファンで賑わい、大変な盛り上がりを見せていた。

今回並み居る強豪を押さえてグラウンドチャンピオンに輝いたのは、宮崎市南方



シャンシャン馬道中唄全国大会 決勝戦

の久保田やよいさんであった。

又、決勝当日は当地方の風習であったシャンシャン馬道中の鵜戸さん詣りが再現された。

今年、桑野浩明・万智子さん（東京都）、マロー

ニデビット・江利子さん（鹿児島県）、森本晋一良・弘子さん（宮崎県）の三組の新婚夫婦が選ばれた。

雨の為、馬に乗っての道中再現は中止となったが、大勢の参拝者から祝福を受けていた。

# シャンシャン馬道中唄全国大会開催 シャンシャン馬道中再現

日	時間	祭礼	名
31日	15時	大夜祭	式
31日	10時	煤祭	祭
27日	11時	天祭	祭
23日	10時	門祭	祭
6日	10時	一之卯	祭
3日	10時	末社	祭
1日	10時	末社	祭
24日	10時	水	神
23日	10時30分	新嘗祭	(五穀豊穣感謝祭)
17日	10時	儀式殿	鎮座記念祭
15日	9時	七五三	祭
7日	10時	立冬	祭
6日	10時	平成	成遷座記念祭
3・4日	11時	中秋	の縁治祭
3日	10時	中祭	祭
1日	10時	月祭	祭
27日	10時	福智	祭
25日	9時30分	皇太子	神祭
17日	10時	神嘗	祭
13日	10時	龜山	神社遥拜式
7日	10時	一之卯	祭
1日	10時	月祭	祭
23日	10時	秋	祭
15日	9時	敬	祭
1日	10時	一之卯	祭
8日	10時	一之卯	祭
1日	10時	月祭	祭
15日	午前	披	祭
8日	10時	一之卯	祭
1日	10時	一之卯	祭

平成十三年辛巳鵜戸神宮神事一覽(七月〜十二月)

## 春の縁日大祭

古来、旧暦三月の祭礼日に五穀豊穣、家内安全を祈願する参拝者で賑わったと伝えられている縁日大祭が三月二十四日、二十五日に行われた。

二十四日は、午前十時三十分より祭典が斎行され、多数の参列を賜った。



シャンシャン馬道中唄

奉祝行事として、「シャンシャン馬道中唄」、「浦安の舞」、「鵜戸さん獅子舞」、舞楽「納曾利」が神前にて奉納された。

参道では両日、地場産品フェアが開催され、終日賑わっていた。



浦安の舞



舞楽 納曾利

ベンチ・柳の木奉納

一月十八日、日南ライオンズクラブが結成四十周年記念事業の一環として、木製ベンチ二却、柳の木一本奉納された。



いさみ太鼓奉納

そろいの鉢巻、ハッピー姿の子供たち六十名が、五月五日の「こどもの日」に健やかな成長を折り「いさみ太鼓」を奉納した。



責任役員氏子総代改選

五月一日に氏子総代会、五月八日に崇敬者総代会を開催、任期満了に伴う責任役員改選が行われた。

これに先立ち氏子総代も各地区において総会が開催され改選が行われた。

その結果、左記の方々が選ばれ委嘱式が行われた。任期はそれぞれ三年である。

記

- 責任役員を委嘱します。
- 平成十三年六月一日
- 田中 静・植野 章一
- 東元 朝平・横山 忠男
- 鬼東 達朗・和田 皓
- 津田 宗治・長友 治
- 氏子総代を委嘱します。
- 平成十三年五月一日
- 長谷川 弘・平下 邦憲
- 後藤 邦治・高橋 和昭
- 松浦 剛士・杉原 与市
- 関屋 寿美男・森 今朝生
- 岩田 義信・関屋 宗憲
- 関屋 勝

辞令

鵜戸神宮権禰宜 永友謙二  
鵜戸神宮禰宜に任ずる  
神社本庁(三月一日付)

主典 磯野英志  
鵜戸神宮権禰宜に任ずる  
神社本庁(三月二十三日)

訃報

長年当神宮のために、奉仕されてきた祢宜・谷口正史氏が一月十九日死去されました。生前のご活躍に感謝し、哀悼の意を表します。

編集後記

私たちの日常語に、雅楽用語から来た言葉があります。打ち合わせ・ろれつが回らない・千秋楽 などなど。ちなみに千秋楽は、舞楽会などの最後に必ずこの曲が演奏されていた事から、相撲や芝居などの最終日を千秋楽と呼ぶようになったのです。(中武)